



従妹の彩月と仲良くなったきつかけは、正直よく覚えていない。

物心がついた頃から、祖父の家に行くとき必ず会うのが彩月だった。歳が近く、おとなしくて人見知りをするところも、私たちはよく似ていた。当然、そんな私たちが他の親族に愛想よく振舞えるわけもなく、親戚の集まりからはみ出した者同士で仲良くなるのに時間はかからなかった。

「なりちゃんに見せたいものがあるの」

彩月がそう言って私を連れ出したのは、たしか五月頃の連休だった。梅雨入り前の気持ちがいい時期で、薄着になった彩月の白くてきれいな肌がまぶしかった。

夕方が終わる頃に祖父の家を出て、大きい道路を少し歩いたら脇道にそれて、暗い森の中を進む。日が沈んだ空は青く染まり、木々の黒いシルエットが浮かんで見えた。お母さんに怒られないか、という不安よりも、彩月と秘密めいたことをする高揚感のほうが、ずっと大きかった。

「ほたる？」

ちらちらとあたりを光が舞い始める。私が聞くと、彩月は嬉しそうに笑った。

「きれいでしょ」

やがて、さらさらと水の流れる音が聞こえてきて、私たちは小さな川べりにたどり着く。私たち二人以外には誰もいない、秘密の場所。

靴を脱いで裸足になった彩月が、そっと水の中に爪先を入れる。彼女の白い親指を起点に水の流れが変わって、周囲を舞っていた光がふわふわと明滅していた。

「つめたいっ」

彩月が小さな声で悲鳴をあげる。彩月に手を引かれるまま、私もそっと水に足先を入れると、あまりの冷たさに小さな悲鳴が思わず喉から漏れた。その声を聞いた彩月は小さく笑い、私の体を抱き寄せた。

目の前にある、可愛い彩月の瞳をじっと見つめる。私も彩月みたいに可愛くなりたかと思っていた。優しく、あたたかくて、吸い込まれそうなくらい、魅力的な瞳が羨ましかった。

私たちは何を思うでもなく、自然と唇を触れ合わせた。冷たい水のせいも、重ねた唇から伝わる彩月の体温は、火傷するくらい熱く感じられた。暗闇の中、煌々と飛び交う黄金色の光に包まれて、私たちはお互いの唇の感触を何度も確かめあった。

そんな誰にも言えない秘密の口づけを、私たちは毎年会うたびに交わっていた。それが恋だったのか、子供の遊びだったのか、幼い私にはわからなかった。

私が大学生になり実家を出て、祖父の家に行かなくなると、彩月と会うことも無くなった。あの川での出来事は夢だったのかもしれない。そう感じるくらいに、彩月との口づけは、私の中でぼんやりと、おぼろげな記憶に変わっていった。

彩月と再会したのは、社会人になって二年目、祖父の葬式に出た時だった。

最初に見た時、知らない人がいると思った。胸元まである髪は綺麗な栗色をしていて、黒い喪服と対照的に、シミひとつない白い肌の女性。昼食会場で席に着く時にちらりと目が合って、その時ようやく、私はその人が彩月だと気づいた。

その瞬間、彩月との記憶が鮮明に蘇り、頭から離れなくなった。

正直、祖父なんてどうでもよかった。遊んでもらった思い出も、大切にしてもらった記憶も無い。それより、私にとっては彩月との記憶のほうがずっと大切だった。

夜、通夜ぶるまいという名の、くだらない宴会からお手洗いに抜け出した私は、廊下で彩月とばったり出くわした。記憶の中のとけいな彩月の姿が、目の前の端麗な女性に塗り替わっていく。何かに捕まったように、私は彩月から目が離せず、ただどこを見ればいいのかもわからず、視線が宙を泳いだ。

「佳奈里ちゃん」

彩月はなぜか、私を名前と呼んだ。視線が交わる。綺麗に整えられた眉と、ぱっちりとした大きな瞳に、私は魂ごと吸い込まれそうになった。

何も言わず私の手を引いた彩月に、私は黙ってついていった。

彩月の真つ黒な服も、私の真つ黒な服も、そのまま闇夜に溶けて消えていってしまった。そうだった。

あたりを光が舞い始めて、私たちはあの時の小川へとたどり着く。

パンプスを脱ぎ捨てて、ストッキングのまま、私たちは水の中へと足を入れた。ばしゃばしゃと水が騒いで、抱き合う私たちの間をすり抜けていく。

「ずっと待ってた」

彩月はそう言って、私の唇を奪った。幼い頃よりも成長した私たちの体は、生まれて初めて感じる熱を持っていた。ふわふわと舞っているたくさんの光が明滅する。何度も重ねた唇が、触れたり離れたりするたびに、私の中で確信が生まれる。

これは、きつと恋だった。

彩月、と名前を呼ぶと、佳奈里と呼び返される。暗闇の中に浮かぶ彼女の顔を見ると、急に恥ずかしくなり私は視線を逸らす。それでも、目を瞑って口づけをしている時だけは、脳裏で何度も彼女の顔を思い描いていた。

「また、ここにきて」

彩月が耳元でささやいた。光が弱まり、暗闇が私たちを包んでいく。それでも、その言葉だけは私の胸に焼き付き、ずっと残り続けた。

さらに時が流れて、私の髪の長さが彩月と同じくらいになった頃。小さな光の欠片に包まれて、私はまた、川のほとりに立っていた。